

青年期の親子間コミュニケーションのあり方

: 青年の発達と Olson の円環モデルの視点から

小野島 萌 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

要約

青年期は、親子間コミュニケーションが複雑化し親子間での葛藤が生じやすい一方、親子間コミュニケーションが青年の適応的な発達や精神的健康にとって重要であると言われている。しかし望ましい親子間コミュニケーションのあり方や青年期の親子間コミュニケーションの理論は未確立である。そこで本研究では、青年期研究の学術誌から抽出した文献を、家族機能に基づく Olson の円環モデルの観点から概観することで、青年期特有の親子間コミュニケーションのあり方を見出すことを目的とした。抽出した 35 件の文献を概観した結果、青年期の親子間コミュニケーションでは、親の受容的、共感的な聴く態度と、青年が自分自身の意見や感情に関して自己開示することの連続性の重要性が明らかになった。また、異性関係にも関心が注がれるようになりアイデンティティ確立や個別化が進む中、親子間コミュニケーションで父親が担う役割が重要になってくることが示唆された。

キーワード : 青年期, 親子間コミュニケーション, アタッチメント, 親子関係, 家族機能

I. 背景と目的

1. 青年期の親子間コミュニケーション

青年期は親からの自立が促進され、仲間関係をより重要視するようになる時期である。この時期は安定した仲間とのアタッチメント (peer attachment) の形成が求められる。このアタッチメント形成には親とのアタッチメントが反映されることがわかっている (Gorrese & Ruggieri, 2012)。しかし青年期は、自律性の発達ゆえに親子のアタッチメント形成がより困難となり、親子関係が不安定になると言われている (金政, 2014)。親子間での物事の捉え方の差異が顕著になったり (Offer et al., 1982; Hartos & Power, 2000)、自律性の発達が重要であるこの時期に親が干渉しすぎることで親子間葛藤が増えたりする (たとえば De Goede et al., 2009)。

ところで、親とのアタッチメントや関係性を測

定する尺度の多くに下位概念としてコミュニケーションが含まれている (Armsden & Greenberg, 1987; Hair, 2005)。親子間コミュニケーションとは親と青年による言語的やり取りを表しており、親とのアタッチメントや親子関係を調整する実際の行動の側面とされている。すなわちコミュニケーションは、情緒的な絆や関係性といった目に見えないつながりを築くための、客観的に確認可能な相互作用行動である。また、青年が不適応状態に陥った時、親子のコミュニケーションがバッファ機能を果たすことも知られている (Stoppa et al., 2011; Kumpfer, 1999)。以上のことから、親子間コミュニケーションは青年の適応的な発達に寄与していると言える。

心身ともに大きく変動が起こる青年期は適応問題などが現れやすい時期だとされており、家庭は青年期の子どもにとって避難所としてあり続ける

(金政, 2014)。不安定さを抱えながらも、青年期も青年の精神的健康や発達のために安定した親とのアタッチメントや関係性が求められる。そしてそれらは、調整機能を果たす親子間コミュニケーションのあり方によって左右され得る。しかし、青年期の親子間コミュニケーションは理論として未だ確立されていないままである。どのようなコミュニケーションによって青年の適応的な発達や精神的健康につながる親子間の調整がされ得るのか明らかになっていない。ゆえに、青年期特有の親子間コミュニケーションとはどのようにあるべきかを見出すことは、青年の人格形成や適応的な発達にとって重要である。

2. 青年期の発達と性差

青年期は第二次性徴を迎え、目に見えて身体に性差が現れ始める。また心理的にも、第二の個体化の時期とも言われる性差の影響に対する考慮が欠かせない時期である。Blos (1967) によれば、精神分析的な性への衝動が青年期前・中期にかけて際立ち、この時期を過ぎて後期になるにつれ統合されていく。これに伴い対人関係においても性差による違いが現れ、前期は同性との関係が強調され、中期は対象が異性へと移る。この変化と並行して、再燃したエディプス葛藤を乗り越え同性の親との同一化が成し遂げられる必要がある。ゆえに、青年期の親子間コミュニケーションは母親との関係性のみでは捉えきれない。また、Marcia (1980) は、アイデンティティの発達は男女ともに質的に異なると主張している。したがって、アイデンティティ確立が課題となる青年期は、その質的な違いとして性差が如実に現れると考えられる。

以上のことから、青年期は青年の心理的発達とそれに伴う親子関係の変化への性差の影響が特に顕著になる。したがって、青年期の親子間コミュニケーションのあり方を捉える際、青年期前・中期に着目し、かつ両親の性差も考慮する必要があ

る。すなわち青年期の親子間コミュニケーションは、青年期前・中期に焦点をあて、母親のみならず父親を含めた、家族全体を包含した観点から捉える必要がある。

3. Olsonの円環モデル

家族システム論に基づいた、家族機能に関する代表的なモデルとして Olson の円環モデル (Olson, 2000) が挙げられる。このモデルは、家族機能を家族の凝集性 (cohesion)、柔軟性 (flexibility) の2軸と、それを促進する行動的側面のコミュニケーション (communication) の3要因で表わしている。凝集性とは家族が寄り添い合おうとする情緒的つながり、柔軟性とは家族内でのリーダーシップ、役割、関係性を変化させられる程度と定義されている。この2つの概念が縦軸と横軸を構成し、それぞれの程度の評価で家族機能の状態が査定される。両者が中庸な状態が適応的な家族機能と仮定されている。

凝集性が中庸な状態は、分離的關係 (separated relation) あるいは結合的關係 (connected relation) と表される。前者は家族のそれぞれが離れている時間が重んじられるが、僅かな時間でも共にいる時間を持ち、一致した意思決定や相互のサポートがある状態である。趣味や活動は別々でも、それが家族内で共有されている。後者は共にいることが最も重んじられ、それぞれ別の友人もいるが家族が中心とされている。趣味や別々の活動も共有されていることが前提である。

柔軟性が中庸な状態は、構造化タイプ (structured type)、柔軟タイプ (flexible type) と表されている。前者の場合リーダーシップを取る者は民主的であり、議論は子どもも交えてなされる。それぞれの役割は家族内で共有されていてあまり変わらず、家族のルール変更もわずかである。それに対し後者の場合、リーダーシップを取る者は平等主義で、意思決定に際しては民主的である。議論は子どもを積極的に交えて開放的に行

われる。役割は共有され必要に応じて変えられ、ルールも年齢に応じて変化し得る。

こうした2つの概念を適応的な状態に導くコミュニケーションは、聴くスキル (listening skills), 話すスキル (speaking skills), 自己開示 (self-disclosure), 明快さ (clarity), 連続性の追跡 (continuity tracking), 尊敬 (respect and regard) から成る。聴くスキルでは共感性と受容性をもって聴くこと、話すスキルでは自分自身のことを話すことが推奨されている。自己開示は感情や関係性を共有することに関連しており、尊敬はコミュニケーションの情緒的な側面と問題解決スキルに関連しているという。こうした要素が上手く循環すればよいコミュニケーションとなり、凝集性や柔軟性を促し、適応的な家族機能となると言われている。

以上のように Olson の円環モデルは、コミュニケーションによって凝集性と柔軟性を中庸に保つことで良好な家族機能が保てるとする、ライフサイクル全般を通したモデルとなっている。

4. 目的

本研究では、親子関係の調整が困難になりやすい青年期の、発達段階特有の親子間コミュニケーションのあり方を見出し、今後の研究への示唆を得ることを目的とする。その際、青年期は人格形成において性差が及ぼす影響を考慮する必要があるため、両親を含めた家族全体への視点が必要である。そこで本研究では、青年期の親子間コミュニケーションのあり方を、家族機能に基づく Olson の円環モデルの観点から検討する。

II. 方法

1. 対象論文

文献の抽出に際し、Journal of Youth and Adolescent から探索する。当学術誌は1972年から現在に至るまで、全45巻を刊行し、計2880本の文献を掲載している。臨床研究のみならず、青

年期という発達段階に着目した実証的研究も掲載している。青年期の実証的研究を全般的に網羅しているため、青年期を発達的な視点から捉えるうえで適切であると考え、対象とした。

2. 抽出方法

文献の抽出は2016年6月に行った。当学術誌より、“communication”をキーワードに検索した。そのうちタイトルに“parent(s)”, “caregiver”, “family”, “maternal”, “parental”といった家族に関連する単語が含まれている文献226件を抽出した。さらに、タイトルに“interaction”が入っている文献や変数として“communication”が用いられている文献、“disclosure”といった親子間の直接的な関わりを扱い、対象に青年期前・中期の青年を含めている文献36件を抽出した。そのうちレビュー論文1件を除外し、35件を概観した(表1)。

III. 結果と考察

該当した35件の文献のうち、質的研究が1件、混合研究が2件、量的研究が32件であった。それらを、家族機能の観点に基づく Olson の円環モデルの枠組みの中で、青年期の発達段階特有の親子間コミュニケーションのあり方を捉えながら概観していく。

1. 親子間コミュニケーションの変化

Hakim-Larson & Hobart (1987) が母子間でのコミュニケーションパターンの変化を見出していたり、Papini et al. (1988) が第二次性徴に伴う青年の身体的変化に沿って家族内コミュニケーションに変化があることを示していたりするように、青年期という発達段階の一時点の中でも、親子間コミュニケーションは変化していき、特に第二次性徴が進む青年期前期が最も親子関係が不安定になる(金政, 2014)。親の青年に対する学校や

表1 本研究で取り上げた文献

| 著者 | 年 | 研究の種類 | 対象年齢 | 著者 | 年 | 研究の種類 | 対象年齢 |
|-----------------------------------|------|-------|--|---------------------------------|------|-------|---|
| Bhargava, S. & Witherspoon, D. P. | 2015 | 量的研究 | 11-14歳の青年1377名 | Ohanessian, C. M. et al. | 2016 | 量的研究 | 15-18歳の青年とその母親141組 |
| Cooper, C. R. & Grotevant, H. D. | 1987 | 量的研究 | 平均年齢17.6歳の子どもが2人以下の家族121組 | Papini, D. R. & Sebbly, R. A. | 1987 | 量的研究 | 13-14歳の青年とその両親51組 |
| Darling, N. et al. | 2006 | 混合研究 | 14-18歳の青年121名 | Papini, D. R. et al. | 1988 | 量的研究 | 12-14歳の青年とその両親25組 |
| Finkenauer, C. F. et al. | 2002 | 量的研究 | 10-14歳の青年1173名 | Reidler, E. B. & Swenson, L. P. | 2012 | 量的研究 | 母子232組(小学5年生65名、中学2年生80名、高校2年生87名) |
| Freed, R. D. et al. | 2016 | 量的研究 | 14-17歳の青年とその母親364組 | Rosenthal, D. A. et al. | 1988 | 量的研究 | 青年期の子どもとその両親 |
| Gantman, C. A. | 1978 | 量的研究 | 14-18歳の子どもを持つ家族30組 | Rote, W. M. & Smetana, J. G. | 2016 | 量的研究 | 高校1, 2年生とその母親167組 |
| Hakim-Larson, J. & Hobart, C. J. | 1987 | 量的研究 | 中学2年生と高校3年生の女子とその母親32組 | Ruthunde, K. | 1997 | 量的研究 | 高校生の子どもとその両親30組 |
| Hamza, C. A. & Willoughby, T. | 2011 | 量的研究 | 中学3年生、高校1, 2, 3年生2941名 | Schuster, R. M. et al. | 2013 | 量的研究 | 13-17歳の青年1145名 |
| Hare, A. L. et al. | 2011 | 量的分析 | 研究開始時13歳の青年184名とその母親(3年後139組) | Steca, P. et al. | 2011 | 量的研究 | 調査開始時平均13.6歳の中学生260名とその親(父または母)150名 |
| Hauser, S. T. et al. | 1987 | 量的研究 | 14-15歳の青年とその両親79組(健常群40組、精神病群39組) | Stoppa T. M. et al. | 2011 | 質的研究 | 小学5年生から高校3年生までの両親972名(母のみ551名、父のみ105名、両親158組) |
| Hessel, H., He, Y., & Dworkin, J. | 2016 | 量的研究 | 12-23歳の子どもの父親158名 | Tang, Sandra. et al. | 2016 | 量的研究 | 中学2年生507名(高校2年時に再度調査した縦断研究) |
| Jerman P. & Constantine N. A. | 2010 | 混合研究 | 8-18歳までの子どもの両親907名 | Taris, T. W. & Semin, G. R. | 1997 | 量的研究 | 14-18歳の子どもとその母親302組(その後のドロップアウトにより288組) |
| Kim, M. & Park, I. J. K. | 2011 | 量的研究 | 韓国系アメリカ人の親子77組(子どもは11-15歳) | Telzer, E. H. et al. | 2014 | 量的研究 | 中学3年、高校1年生385名 |
| Lefkowitz, E. S. et al. | 1996 | 量的研究 | 11-14歳の青年と母親31組 | Titzmann, P. F. et al. | 2015 | 量的研究 | 10-18歳までの子どもとその母親382組(移民群185組、母国群197組) |
| Lippold, M. A. et al. | 2015 | 量的研究 | 母子432組(子どもが小学6年生の時から中学2年生まで:調査開始時の平均年齢12.14) | Van Dijk, M. P. A. et al. | 2014 | 量的研究 | 12-15歳までの青年323名 |
| Mumford, E. A. et al. | 2016 | 量的研究 | 親子1117組(子どもは12-18歳) | Werrbach, G.B. et al. | 1992 | 量的研究 | 高校生の子どもの家族(両親ときょうだいい人)66組 |
| Niemi, P. M. | 1988 | 量的分析 | 15歳の青年とその親(両親、父親、または母親) | Youniss J., & Ketterlinus R. D. | 1987 | 量的研究 | 中学3年生・高校2年生605名 |
| Noller P. & Callan V. J. | 1990 | 量的研究 | 13-17歳の青年296名 | | | | |

家庭での干渉も減っていく (Bhargava & Witherspoon, 2015) 青年の変化に沿って親も柔軟に変化する必要を迫られる。円環モデルにおける役割やルールの変更が柔軟に変えられることが求められる時期だと考えられる。

母子間コミュニケーションでは、青年期前期は母親が要求することによって会話を調整し、子どもが容認したり助言したりする一方で、青年期中期は母子が互いに賛成し合う、または母親は問題解決に向かう傾向があるのに対し、子どもはそれに多様な形式の応答をするパターンが多くなる (Hakim-Larson & Hobart, 1987)。家族内コミュニケーションでは、母子間では葛藤が増える一方で情緒的な内容が減り、父子間では父親のサポート的な内容が増える (Papini et al., 1988)。

青年は親の支持的、受容的な発言に支えられて親とのコミュニケーションを成立させており、特に情緒的な側面への考慮が必要であることがうかがえる。また、特に母子間で青年が親に対し助言することも増えるなど、発達に伴い親との対等な立場でのコミュニケーションが増えていることがわかる。第二次性徴を経た青年は、家族内で子どもでありながら大人と同じ役割も果たすようになってくると考えられる。

2. コミュニケーション様式

この変化に対応するにあたり、Olson が聴くスキルの適応的なあり方として推奨している共感的、受容的であることが親には求められる。Hare et al. (2011) は青年が評価する母親の受容と自身の

心情の開示は強い関連があることを示している。Lippold et al. (2015) は、マインドフルな養育であるほど定期的な子どもからの打ち明け話がなされていることを示唆している。これらの研究から、親の受容的に聴く姿勢は、青年の、適応的な話すスキルである自発的な感情に関する自己開示に繋がっていると考えられる。すなわちこのようなコミュニケーションが親と青年を青年の情緒的な側面の情報によってつなぐ役割を担っている。また、このように家族とのコミュニケーションの中で青年自身の感情が明快になることは、青年の精神的健康に直接寄与している (Freed et al., 2016)。そうであるならば、Finkenauer (2002) が示した青年の親への秘密保持が青年の低い自尊感情や抑うつ感、ストレスなどに横断的にも縦断的にも寄与しているという結果は、多すぎる秘密保持はアタッチメントの形成不全にも関連するほどの親子間のつながりの希薄さを予期するのかもしれない。

青年側のコミュニケーションに着目すると、青年の不賛成意見を表明する度合いが親の子どもの行動に関する知識の予測因になっており (Darling et al., 2006)、自律性が発達する青年期においては青年の自己開示が親と青年をつなぐ役割を担っていると言える。親子間での高い疎通性が生まれると、親子間での価値観が一致しやすくなる (Tang et al., 2016) など、親との類似点も多くなる (Steca et al., 2011)。ただし価値観に関しては青年の親からの心理的離乳の影響もあるため、結論は一義ではない (Werrbach et al., 1992)。価値観の共有はされないまでも、親にとって青年が自ら自分の行動や感情のことを親に打ち明ける自己開示は、親が青年に関する情報を把握できるだけではない。

青年期は自律性の発現ゆえに、親と共有する時間を青年期以前ほど確保することが難しくなる。これに対し親は青年の行動を制限することで青年の危険を回避しようとすることもあるが、それでは青年のことは知り得ず、青年の不適応状態の防

止にはならない (Hamza & Willoughby, 2011 ; Schuster et al., 2013)。しつけとしての親の批判は、青年の自己開示とは無関係であることも示されており (Rosenthal et al., 1988)、厳しく言っても青年が親の言い分をきくとは限らないのである。Mumford et al. (2016) が、怒りやすさを示す無関心／厳格型、制限／厳格型の親を持つ青年の暴力に対する耐性が高く恋人関係における虐待体験に繋がりがやすいことを示しているように、青年の危険を冒すリスクを高めてしまう結果にもなりかねない。こうした研究からも、青年期は親が青年の行動を一方的にコントロールしようとしたり青年自身のことを聞き出そうとしたりすることは逆効果になることさえある。青年の自己開示は、親が青年の情報を把握することで、親が落ち着いて受容的、共感的な態度をとりやすくなるという役割を持つ。このように親の適応的な聴くスキルと青年の適応的な話すスキルは連続性を持ったものだと考えられ、こうした親子間コミュニケーションによって情緒的つながりを強めることができると考えられる。特殊な例として、人種によって文化的に家族を重んじる風潮が強い場合は、その家族主義の強さが問題行動の抑止につながっていることもある (Telzer et al., 2014)。家族に対する認識の文化差への考慮は必要である。

3. コミュニケーションの開放性

コミュニケーションのあり方は、円環モデルが示す適応的な柔軟性にも見て取れる。家族内でのリーダーシップは民主的な姿勢が求められ、子どもも交えた意思決定や議論がなされることが推奨されている。これは、Taris & Semin (1997) の、穏やかとは言えない話題は、時に葛藤となってもしっかりと話し合うことが重要であるという主張に通じる。同じように、夫婦間葛藤と一見青年の精神的健康上リスクになり得る場面も、開放的で頻繁に起こるほど青年の価値観は豊かであり家族の情緒的雰囲気もいいことが示されている

(Niemi, 1988)。また Van Dijk (2014) は、開放的な親子間コミュニケーションは青年の自己概念の明快さとの関連がみられると示しており、青年の話すスキルや明快さという肯定的な影響をもたらす。話し合うことが難しいことも含め開放的に議論したり話し合ったりする場を設けることが重要だと考えられる。青年が戸惑いや不快感を感じているほど母親に多くの発話を委ねていたり (Lefkowitz et al., 1996)、社会全体が危機に陥り親も不安を感じている時もその話題を共有する重要性が主張されていたり (Stoppa et al., 2011) するように、こうした場を設けていることも青年がいざとなった時に親を頼ることにつながっているのかもしれない。

しかし Ohannessian et al. (2016) が、青年が評価するコミュニケーションの開放性は母親が評価するよりも低く、反対にコミュニケーションに対する問題の評価は青年の方が母親よりも高いことを示している。また Reidler & Swenson (2012) は、母子関係と子どもの自己開示の母子間の評価の差が子どもの適応に直接影響を及ぼしていることを明らかにした。さらに Titzmann et al. (2015) は、そのような認識の差異が発達に伴って広がっていくことを示している。青年期の自律性の発達に伴い、親子間の認識の差異を生み (Rote & Smetana, 2016) 徐々に広がって行き、広がりすぎると青年の不適応状態を招く。親子間コミュニケーションで外在化されないものの把握は難しいが、青年の自己開示による情報を親が受容的に聴くコミュニケーションにより親子間で認識のすりあわせを頻繁に行うことが望まれる。

4. 性差と役割変容

家族からの自律性が促されると家族以外との関係性との結びつきが強くなる (Cooper & Grotevant, 1987)。こうして家族の外で親以外との対人関係が重要になる中で、性差が青年期以前よりも一層関係性に影響してくる。親子間コミュ

ニケーションでも性差による違いが顕著に現れてくる。青年と両親の性別の違いに着目した Hauser et al. (1987) は、家族で議論を行う場面でのコミュニケーションの様子から、男女問わず青年は父親と多く会話していることを明らかにしている。Ruthunde (1997) や Papini & Sebbby (1987) の研究では、発話行動や家族関係の評価において青年と父親は同じように評価する傾向にあることが示されている。青年期に入ると、母子間が中心であった親子間コミュニケーションにおいて、父親が担う役割の比重が大きくなっていく。Kim & Park (2011) は、父親とのコミュニケーション不足が子どもの内在化症状に関連していることが明らかにしている。親子間コミュニケーションにおいて母親が担っていた役割のみならず、青年の適応的な発達には父親の役割も必要になっていく。青年期を迎え、役割の変容と言う柔軟性が家族に求められると考えられる。

特にこの父親の影響の大きさは青年男子において顕著である。Noller & Callan (1990) の研究では、女子の場合父親よりも母親との会話の頻度が多いが、男子の場合両親への評価に差はなく、父親と興味、性的情報や問題、一般の問題といった話題について特に多く話していることを示している。性に関する情報のコミュニケーションでは、青年女子は母親との方が多くのトピックを話す一方で、男子には両親の性差による違いは認められなかった (Jerman & Constantine, 2010)。この結果からもわかるように、特にエディプス葛藤の再燃の克服 (Blos, 1967) において、青年男子にとって性に関する問題では父子間コミュニケーションが特に重要な意味を持つ。Hauser et al. (1987) の研究では父親が問題解決的な表現が多い一方母親は悩んで混乱しているような表現が多かったとしており、こうした家族間での議論の場でリーダーシップをとるような父親の様子は男子青年のアイデンティティ確立におけるモデルとしても重要な役割を果たすといえる。また母親は、

母親が主導して担ってきた役割を父親にも担ってもらうことで負担が軽減されることも考えられる。父親、母親それぞれからのケアされている度合い (caring) と自分のことを理解してもらっていると感じている度合い (knowing) を比較した Youniss & Ketterlinus (1987) の研究では、男女ともに母親のほうがどちらの得点も高かったものの、男子のほうが父親の評価は高かったことが明らかにされている。母子間でのアタッチメント関係は継続しているものの、青年男子にとっては同性である父親との親しさも重要であると考えられる。これは、Blos (1967) が第二の個体化の過程の中で起こるとしている同一化の過程の表れとも考えられる。ただしこのように親子間コミュニケーションでの父親の重要性が示されているながら、父親も青年もどちらも一番に情報共有として使っていたのはメールなどの電子機器である (Hessel et al., 2016)。しかしそれでも父親とのコミュニケーションは青年の内的／外的適応に関連していることから (Hessel et al., 2016)、コミュニケーションを取ること自体が父親には求められると考えられる。

IV. まとめ

本研究では、青年期という発達段階における親子間コミュニケーションのあり方を、家族機能に基づく Olson の円環モデルの枠組みを用いながら捉え、今後の研究への示唆を得ることを目的とした。青年期研究の学術誌から親子間コミュニケーションを扱った文献を抽出し、概観した。

その結果、青年と親とのコミュニケーションでは親の受容的に聴く姿勢と青年の自分の感情や意思を親に開示することの連続性が重要であることが示唆された。また、青年期以前は母親が主導していた親子間コミュニケーションにおける父親との役割分担という、家族内での役割変容が必要であることが明らかとなった。すなわち、青年期の親子間コミュニケーションのあり方として、①親

の発言が主体である形式から、青年の自己開示を主体とし親が聴くことに重きを置く形式への親のコミュニケーション態度の変容、②母親主体から父親と母親の協働による親子間コミュニケーションという両親間の役割変容、2つの変化が起こり得ることが示された。

以上を踏まえ、今後の青年期の親子間コミュニケーション研究では縦断的な変化を捉えた研究が求められる。青年期以前から青年期前、中、後期にかけてどのようにコミュニケーション内で2つの変化が起こっていくのかといった、変容プロセスを検討する研究が望まれる。

文献

- Armsden, G. C., & Greenberg, M. T. (1987). The Inventory of Parent and Peer Attachment: Relationships to well being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **16**, 427-454.
- Bhargava, S., & Witherspoon, D. P. (2015). Parental Involvement Across Middle and High School: Exploring Contributions of Individual and Neighborhood Characteristics. *Journal of Youth and Adolescence*, **44**, 1702-1719.
- Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *Psychoanal Study Child*, **22**, 162-186.
- Cooper, C. R. & Grotevant, H. D. (1987). Gender Issues in the Interface of Family Experience and Adolescents' Friendship and Dating Identity. *Journal of Youth and Adolescence*, **16**, 247-264.
- Darling, N., Cumsille, P., Caldwell, L. L., & Dowdy, B. (2006). Predictors of Adolescents' Disclosure to Parents and Perceived Parental Knowledge: Between- and Within-Person Differences. *Journal of Youth and Adolescence*, **35**, 667-678.
- De Goede I. H. A., Branje S. J. T., & Meeus W. H. J. (2009). Developmental Change in Adolescents' Perceptions of Relationship with Their Parents. *Journal of Youth and Adolescence*, **38**, 75-88.
- Finkenauer, C. F., Engels, R. C. M. E., & Meeus, W. (2002). Keeping Secrets from Parents: Advantages and Disadvantages of Secrecy in Adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **31**, 123-136.
- Freed, R. D., Rubenstein, L. M., Daryanani, I., Olino, T. M., & Alloy, L. B. (2016). The Relationship between Family Functioning and Adolescent Depressive Symptoms: The Role of Emotional

- Clarity. *Journal of Youth and Adolescence*, **45**, 505-519.
- Gantman, C. A. (1978). Family Interaction Patterns Among Families with Normal, Disturbed, and Drug-Abusing Adolescents. *Journal of Youth and Adolescence*, **7**, 429-440.
- Gorrese, A. & Ruggieri, R. (2012). Peer Attachment: A Meta-analytic Review of Gender and Age Differences and Associations with Parent Attachment. *Journal of Youth and Adolescence*, **41**, 650-672.
- Hakim-Larson, J. & Hobart, C. J. (1987). Maternal Regulation and Adolescent Autonomy: Mother-Daughter Resolution of Story Conflicts. *Journal of Youth and Adolescence*, **16**, 153-165.
- Hamza, C. A. & Willoughby, T. (2011). Perceived Parental Monitoring, Adolescent Disclosure, and Adolescent Depressive Symptoms: A Longitudinal Examination. *Journal of Youth and Adolescence*, **40**, 902-915.
- Hare, A. L., Marston, E. G., & Allen, J. P. (2011). Maternal Acceptance and Adolescents' Emotional Communication: Longitudinal Study. *Journal of Youth and Adolescence*, **40**, 744-751.
- Hartos J. L. & Power T. G. (2000). Association between Mother and Adolescent Reports for Assessing Relations between Parent-Adolescent Communication and Adolescent Adjustment. *Journal of Youth and Adolescence*, **29**, 441-450.
- Hauser, S. T., Book, B. K., Houlihan, J., Powers, S., Weiss-Perry, B., Follansbee, D., Jacobson, A. M., & Noam, G. G. (1987). Sex Differences within the Family: Studies of Adolescent and Parent Family Interactions. *Journal of Youth and Adolescence*, **16**, 199-220.
- Hair, E. C., Moore, K. A., Garrett, S. B., Kinukawa, A., Lippman, L. H., & Michelson, E. (2005). The Parent-Adolescent Relationship Scale. Moore, K. A., & Lippman, L. H. (Ed.). *What Do Children Need to Flourish?*. New York. pp.183-202.
- Hessel, H., He, Y., & Dworkin, J. (2016). Paternal Monitoring: The Relationship between Online and In-Person Solicitation and Youth Outcomes. *Journal of Youth and Adolescence*, 1-12. DOI:10.1007/s10964-016-0490-6
- Jerman P. & Constantine N. A. (2010). Demographic and Psychological Predictors of Parent-Adolescent Communication about Sex: A Representative State Analysis. *Journal of Youth and Adolescence*, **39**, 1164-1174.
- Kumpfer, K. L. (1999). Factor and Processes Contributing to Resilience The Resilience Framework, In Glantz & Johnson (Ed.). *Resilience and Development: Positive Life Adaptations*. New York : Kluwer Academic/Plenum Publishers. pp.179-217.
- Kim, M. & Park, I. J. K. (2011). Testing the Moderating Effect of Parent-Adolescent Communication on the Acculturation Gap-Distress Relation in Korean American Families. *Journal of Youth and Adolescence*, **40**, 1661-1673.
- Lefkowitz, E. S., Kahlbaugh, P. E., & Sigman, M. D. (1996). Turn-Taking in Mother-Adolescent Conversations about Sexuality and Conflict. *Journal of Youth and Adolescence*, **25**, 307-321.
- Lippold, M. A., Duncan, L. G., Coatsworth, J. D., Nix, R. L., & Greenberg, M. T.(2015). Understanding How Mindful Parenting May Be Linked to Mother-Adolescent Communication. *Journal of Youth and Adolescence*, **44**, 1663-1673.
- Marcia, J. E. (1980). Identity in adolescence. *Handbook of adolescent psychology*. 9. New York, 159-187.
- Mumford, E. A., Liu, W., & Taylor, B. G. (2016). Parenting Profiles and Adolescent Dating Relationship Abuse: Attitudes and Experiences. *Journal of Youth and Adolescence*, **45**, 959-972.
- Niemi, P. M. (1988). Family Interaction Patterns and the Development of Social Conceptions in the Adolescent. *Journal of Youth and Adolescence*, **17**, 429-444.
- Noller P., & Callan V. J. (1990). Adolescents' Perceptions of the Nature of Their Communication with Parents. *Journal of Youth and Adolescence*, **19**, 349-362.
- Norrell, J. E. (1984). Self-Disclosure: Implications for the Study of Parent-Adolescent Interaction. *Journal of Youth and Adolescence*, **13**, 163-178.
- Offer, D., Ostrov, E., & Howard, K. I. (1982). Family Perceptions of Adolescent Self-Image. *Journal of Youth and Adolescence*, **11**, 281-291.
- Ohannessian, C. M., Laird, R., & Reyes, A. D. L. (2016). Discrepancies in Adolescents' and Mother's Perceptions of the Family and Mother's Psychological Symptomatology. *Journal of Youth and Adolescence*, **45**, 2011-2021.
- Olson, D. H. (2000). Circumplex Model of Marital and Family Systems. *Journal of Family Therapy*, **22**, 144-167.
- Papini, D. R., Datan, N., & McCluskey-Fawett, K. A. (1988). An Observational Study of Affective and Assertive Family Interaction during Adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **17**(6), 477-492.
- Papini, D. R. & Sebbly, R. A. (1987). Adolescent Pubertal Status and Affective Family Relationships: A Multivariate Assessment. *Journal of Youth and Adolescence*, **17**, 1-15.
- Reidler, E. B. & Swenson, L. P. (2012). Discrepancies between Youth and Mothers' Perceptions of Their Mother-Child Relationship Quality and Self-Disclosure: Implications for Youth- and

- Mother-Reported Youth Adjustment. *Journal of Youth and Adolescence*, **41**, 1151-1167.
- Rosenthal, D. A., Efklides, A., & Demetriou, A. (1988). Parental Criticism and Young Adolescent Self-Disclosure: A Cross-Cultural Study. *Journal of Youth and Adolescence*, **17**, 25-39.
- Rote, W. M. & Smetana, J. G. (2016). Patterns and Predictors of Mother-Adolescent Discrepancies across Family Constructs. *Journal of Youth and Adolescence*, **45**, 2064-2079.
- Ruthunde, K. (1997). Parent-Adolescent Interaction and Optimal Experience. *Journal of Youth and Adolescence*, **26**, 669-689.
- Schuster, R. M., Mermelstein, R., & Wakschlag, L. (2013). Gender-Specific Relationships between Depressive Symptoms, Marijuana Use, Parental Communication and Risky Sexual Behavior in Adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **42**, 1194-1209.
- 金政祐司(2014). 子安 増生・二宮 克美 (編). 青年期発達百科事典. 丸善出版, pp.1-8.
- Steca, P., Bassi, M., Caprara, G. V., & Fave, A. D. (2011). Parents' Self-efficacy Beliefs and Their Children's Psychosocial Adaptation During Adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **40**, 320-331.
- Stoppa T. M., Wray-Lake L., Syvertsen A. K., & Flanagan C. (2011). Defining a Moment in History: Parent Communication with Adolescents About September 11, 2001. *Journal of Youth and Adolescence*, **40**, 1691-1704.
- Tang, Sandra., McLoyd, V. C., & Hallman, S. K. (2016). Racial Socialization, Racial Identity, and Academic Attitudes among African American Adolescents: Examining the Moderating Influence of Parent-Adolescent Communication. *Journal of Youth and Adolescence*, **45**, 1141-1155.
- Taris, T. W. & Semin, G. R. (1997). Parent-Child Interaction during Adolescence, and the Adolescent's Sexual Experience: Control, Closeness, and Conflict. *Journal of Youth and Adolescence*, **26**, 373-398.
- Telzer, E. H., Gonzales, N., & Fuligni, A. J. (2014). Family Obligation Values and Family Assistance Behaviors: Protective and Risk Factors for Mexican-American Adolescents' Substance Use. *Journal of Youth and Adolescence*, **43**, 270-283.
- Titzmann, P. F., Gniewosz, B., & Michel, A. (2015). Two Sides of a Story: Mothers' and Adolescents' Agreement on Child Disclosure in Immigrant and Native Families. *Journal of Youth and Adolescence*, **44**, 155-169.
- Van Dijk, M. P. A., Branje, S., Keijsers, L., Hawk, Ss. T., Hale III, W. W., & Meeus, W. (2014). Self-Concept Clarity across Adolescence: Longitudinal Associations with Open Communication With Parents and Internalizing Symptoms. *Journal of Youth and Adolescence*, **43**, 1861-1876.
- Werrbach, G.B., Grotevant, H. D., & Cooper, C. R. (1992). Patterns of Family Interaction and Adolescent Sex Role Concepts. *Journal of Youth and Adolescence*, **21**, 609-623.
- Youniss J. & Ketterlinus R. D. (1987). Communication and Connectedness in Mother- and Father-Adolescent Relationships. *Journal of Youth and Adolescence*, **16**, 265-280.

謝辞

本論文の執筆にあたり、ご多忙の中多大なるご指導を賜りました青木紀久代先生に、厚く御礼申し上げます。また、論文推敲にあたりご協力頂きました太田祐貴子様、古志めぐみ様、大塚己恭様、殷夢茜様に深く感謝致します。